

古今東西の土間と板敷の生活

土 田 充 義

1. はじめに

私達の生活は主に板敷や畳の上で行われている。時には板敷にじゅうたんを敷いたり、畳に座布団を置いて座る。ここ30年間にイス式生活がとり入れられ、食堂では食卓を囲んで椅子が置かれている。ソファがある応接間も子供達の勉強部屋もイス式生活である。

そのようにイス式生活の隆盛から畳の生活は板敷の生活へと変化している。今後とも板敷の生活は重視されていくであろう。それはイスを始めとする家具としっかり結びついて、非常に機能的であるために更に拍車をかけることになる。

一方土間は玄関の靴脱場に使われる程度でだんだん縮小しながらも失われることはない。以前は農家の土間では農作業から帰ると下足をはいたままで、土間で食事をしたり、土間でわらじをあんだりしていた。その土間は広く大切にみつかわれていた。

また都市住宅である町家は片側を通路として土間があった。農家の広い土間にしても、町家の片側の土間にしても板敷ときちんと分けられていた。土間の生活と板敷の生活は接してはいるものの区別されていた。ところがポンペイ島の伝統的な住居を調べるにあたり、土間と板敷がうまく融合していることに気づき、もう少し土間の生活を深める必要を感じた。つまり、私達の生活にとって土間とはいったい何なのかを更に考えておく必要があるということである。現在日本人の生活から土間が失われそうになっているこの時期に改めて、土間の意味を考えることも必要であろう。古今東西を通じて土間（時には石であったり、コンクリートであったりする）を生活面とする方が多いであろう。

2. 日本の土間

日本の住居は二系統あったと考えられる。一つは堅穴住居（図1・2）でそれは土間を生活面とした住居である。これをA系統としよう。次をB系統として、これは高床住居（図3）で板敷を生活面とした住居である。A系統は寒さに耐えられることから北方より伝来したと考えられ、一方B系統は南方から伝わった。ところがBC7500年の縄文時代早期にすでに鹿児島県国分市で堅穴住居が発掘されている（上野原遺跡）。その縄文時代に高床住居はなかっただろうと考えられる。

ところがBC2500年に出土した直径20センチの柱1本（富山県の桜町遺跡）から判断して高床住居は現存したとしている（石野博信「古代住居のはなし」吉川弘文館、平成7年）。すでに縄文時代にはこのA系統とB系統が混在していたといえる。

次の弥生時代（BC.300～AD.300）になると各地に高床住居の遺構を確かめうるができる。例えば長崎県土生遺跡では太い柱が出土し（図4）、高床住居として考えられる。これらのことか

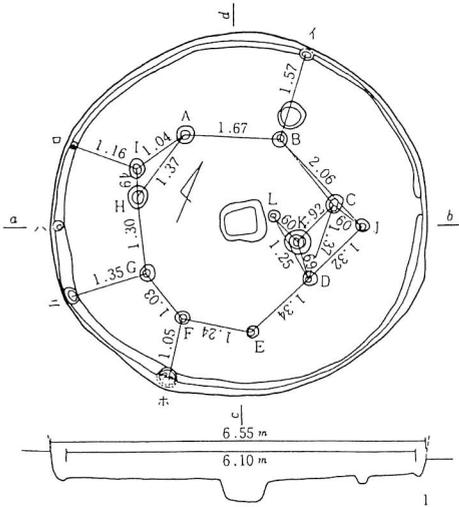


図1 福岡市宝台遺跡C地区5号住居跡
(弥生時代中期)

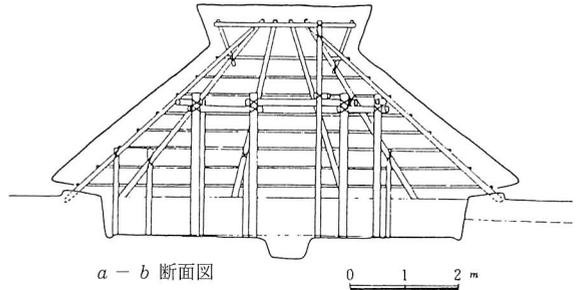


図2 同住居復元図
佐藤浩氏作成「宝台遺跡」
—福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡—
日本住宅公園 1970

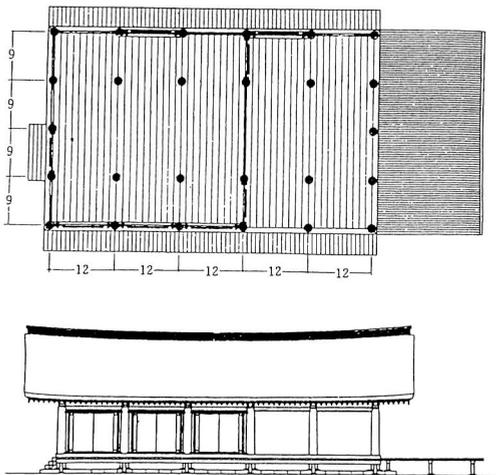


図3 法隆寺伝法堂前身建物
(浅野清著「奈良時代建築の研究」)
(単位尺)



図4 佐賀県土生遺跡(弥生時代中期)の堀立柱
直径21.7cm、柱の穴は運搬に用いたと考えられる。その周囲に板材がある。

ら分かるように日本ではまず竪穴住居が全国に建てられ、その後に高床住居が南方から伝来してこれも全国に建つことになったといえる。その竪穴住居は縄文時代晩期に存在したといわれ、それが弥生時代になると全国で確かめることができる。更に奈良県佐味田古墳から出土した4世紀の家屋文鏡は竪穴住居(図5)と高床住居が共に描かれている。これに描かれた高床住居には階段があり、

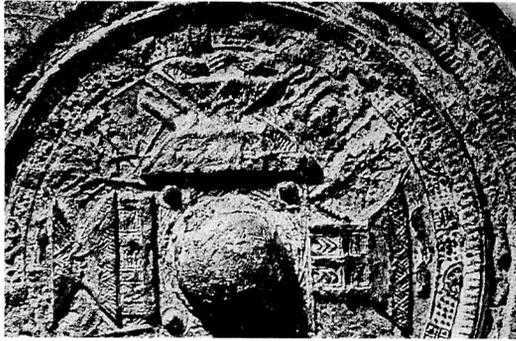


図5 奈良県佐味田古墳出土家屋文鏡（5世紀初）
（直径23.5cm）

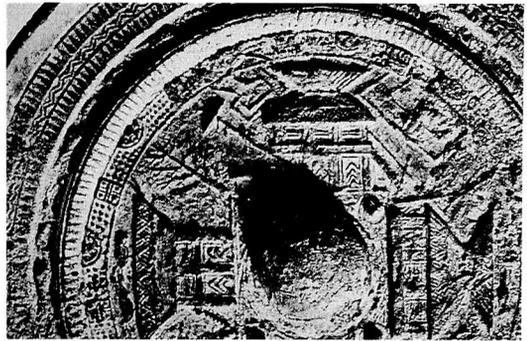


図6 家屋文鏡中央の家屋が高柱住居で旗を立てている。

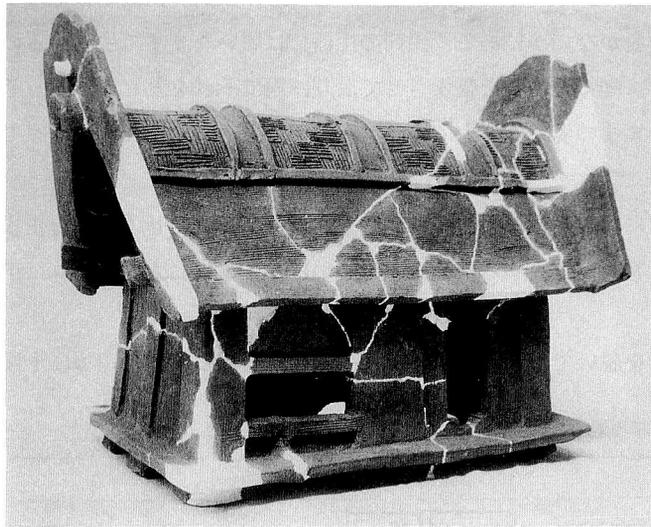


図7 家形埴輪「埴輪聚成」より

旗が立てられ、露台があり、いかにも上層の家のように感じる（図6）。それに地上より高いわけですから、地上に居る人と板敷の上にいる人を較べると、いかにも板敷の上にいる人の方が支配者に見える。

そこでA系統の住居とB系統の住居を次のように考えることができる。

A系統(竪穴住居)—————> 農民住居・・・被支配者の住居

B系統(高床住居)—————> 寝殿造(平安時代の貴族の住宅)—————> 書院造(16世紀
トコ・タナを付けた座敷が生れる)—————> 上級武士
住宅 支配者の住居

この支配者の板敷を A 系統はとりいれて、土間の生活に板敷の生活を加えた。それが何時頃か明らかになっていないが、竪穴住居に壁が成立し、中心にあるいりから住居の端のかまどへ移行する。それは弥生時代の次の古墳時代になってである。古墳時代になると、つまり 4・5 世紀になると家形直輪（図 7）があり、床は板敷と思われる。でもこれは支配者の住居かもしれないので、土間の生活に板敷部分加わったといえないかもしれない。それは高床住居（B 系統）と竪穴住居（A 系統）が併存しているといった方がいいかもしれない。

そこで現存する農家の形態が何時頃成立したかということになる。それはそんなに古くなく 17 世紀に入ってから、つまり徳川政権になってからと考えられる。

3. 土間と板敷の相違

土間と板敷の使い方でのいろいろな相違があるにしても、土間の生活と板敷の生活で基本的に異なる点は履物を脱ぐか脱がないかにある。土間の生活では履いたままで生活するので、外部との連続で作業が進められる。庭で野作物を乾燥させており、雨でそれを取り入れる。それは履物を脱ぐことなく、容易にそのままの姿で作業ができる。そのために最近建てられた農家でも広い土間を設けている。

時には土間とせずにコンクリートにする場合もある。いずれにせよ履いたままで住居内に入る。街路に面した町家も客人が購入するために履物をつけたまま店に入る。これは出入りが容易であろう。

一方板敷では履物を脱いで上がる。そこでは生活面が異なる。そのために土間と板敷は融合する

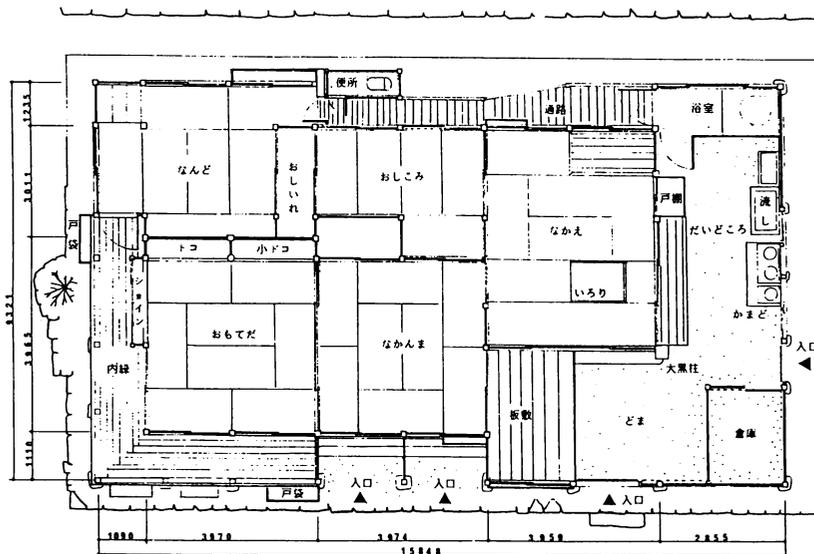


図 8 海田家住宅現状平面図（「文化財紀要第 3 集」北郷町教育委員会 1995）

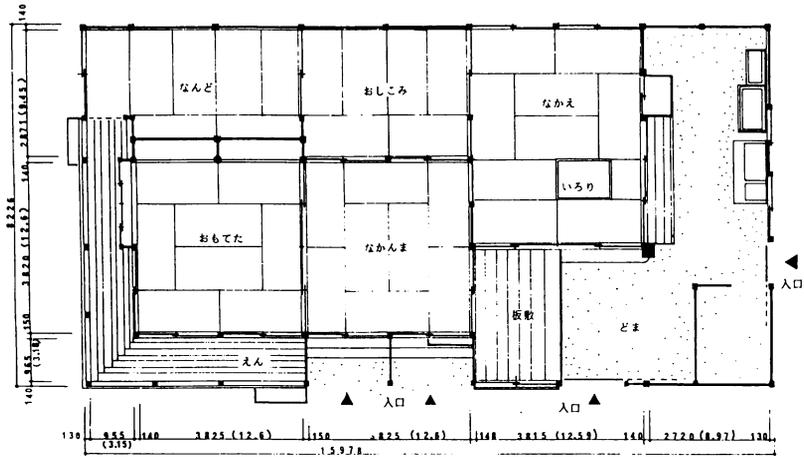


図9 海田家住宅復元平面図

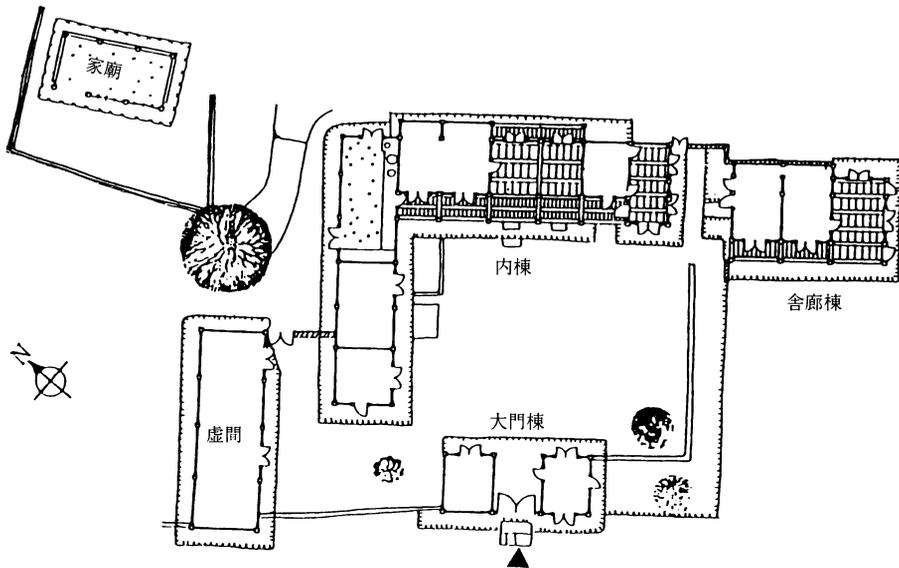


図10 李 東琦氏住宅平面図
(慶尚北道月城郡江東面良洞里214-1「良洞マウル調査報告書」1979)

ことなく、きんちと区別されている。このことは日本(図8・9)や韓国(図10・11)の住居でいえることで、中国少数民族の土家族の住居は中央が土間、両側が板敷の部屋、その境に扉を設けるが普通は開いていて、履いたまま出入りをするので土間と板敷の区別は明確ではない(図12・13)。また履かないままの生活では板敷を腰掛けに使い、足を土間に出したままにする。これはミクロネシアポンペイ島の人々の集会所における土間と板敷の使い方である。ここでは土間と板敷が融合し



図11 李 東琦氏住宅外観

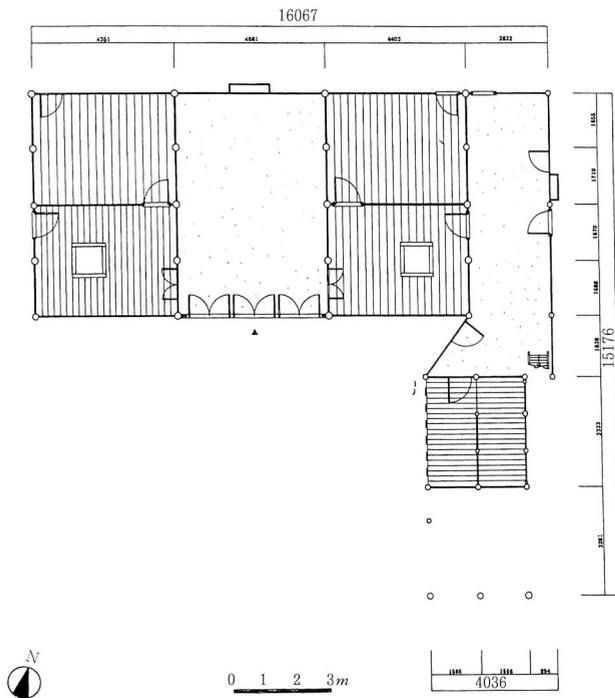


図12 黄 昌鳳氏住宅平面図
(中国湖南省永順県澤家郷西那村巴家組)

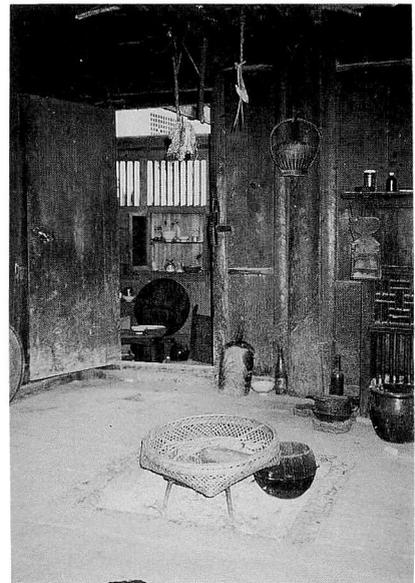


図13 黄 昌鳳氏住宅内部

ている。したがって、日本の土間と板敷を生活上で異にしている大きな理由は履物を脱ぐか脱がないかによるといえる。このことが土間と板敷の生活を隔てていると考えられる。

4. ヨーロッパの板敷と日本の板敷

ヨーロッパの住居について一般的にいわれていることだが、自然が厳しいために、また外敵の防衛のために住宅の内と外とを壁や扉で確実に仕切っている。一方日本では屋敷の周囲に高い塀を築くことなく、住居は外に向って開放的に造る。座敷から縁側、縁側から庭へと連続して、外と内の境が明確でない。したがって、ヨーロッパの住居はまず外側の枠（壁や扉）を決め、次に住居内を分割し、増築はせずに住居内で解決する。解決できなければ更に規模の大きな住居に移転することになる。日本では外へ向けて増築する。中心に身舎（もや）があって、周囲に庇を出して平面の拡張を行う。ヨーロッパと日本では外に対しての考え方も増築の考え方も異なる。これらのことを前提にして、住居の床材について考えてみよう。ヨーロッパでは床を石敷きにししたり、コンクリートにししたり、板敷にししたりする。更にその上にじゅうたんを敷いたり、種々な工夫をしながら快適な生活を営んでいる。そこでの生活は床材が何であろうと椅子・テーブル・ベッド等の家具の使い方に主力がおかれ、床材は別に気にしていないかのごとく種々の材料が使われ、ヨーロッパの住居では土間と板敷を区別することはない。

日本の住居では板敷（板の上に敷く畳も含めて）が外部と密接に連続するが、土間の部分は外界と壁や扉で区別する。この方法はヨーロッパの住宅と似ている。やはり日本の板敷とは非常に異なることを指摘しておきたい。この板敷の生活によって日本人は座ることを始めたし、起居様式は板敷の生活から生まれたといってもよいであろう。

5. 日本の板敷とポンペイ島の板敷

日本の民家と南方民家との関係を述べた先達の論文がある。例えば小倉強は「今後の問題」（「民家V-1」昭16年）で、1. 日本民家型式の分布及系統 2. 日本民家の基本問題の追及 3. 日本民家の細部研究をとりあげ、1の項目の中に「特に日本民家と交渉深かるべき南方民家（中国南部・インドネシア・ミャンマー・フィリピンを指す）の研究は我等の前に横たわる大問題である」と述べている。また石原憲治は「かまど」を別棟とする南方系の民家がポリネシア・ミクロネシアに多く現存していると述べている。（「日本農民建築 第二輯」昭和10年）。

確かにポンペイ島の「かまど」は別棟にある（図14）。しかし屋根とそれを支える柱だけで壁や扉はない。今まで述べてきた日本の土間は閉鎖的で大いに異なる。土間に「かまど」が現存して見られるけれども以前は「いろり」だけが板敷にあって、それで炊事していた。¹¹ その後にかまどの出現が南西諸島で見られるという。これと同じことが平成8年湖南省土家族の住居を調べた「いろり」でもいえる。ポンペイ島の火どころは「かまど」というのか「いろり」というのか、あいまいなので、「かまど」は煙道があり、「いろり」はないと規定するとポンペイ島の火どころは多くが地面にある「いろり」ということになる。その「いろり」は土間にある。しかし、南西諸島の別棟の土間は閉鎖的で、ポンペイ島の開放的な土間とのつながりは薄いと考えられる。つぎに板敷の住居を考えてみたい。短期間で全島を廻ったけれども見落としがあるかもしれない。その伝統的な住居

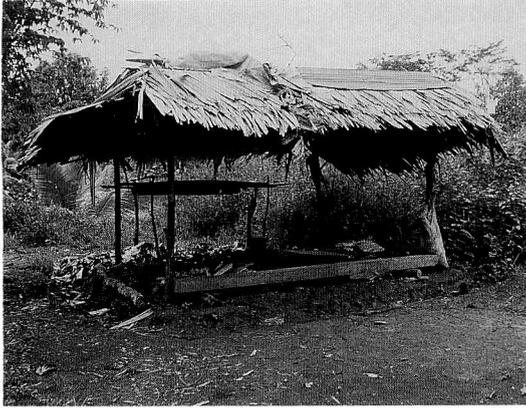


図14 ポンペイ島の「かまど」のある別棟

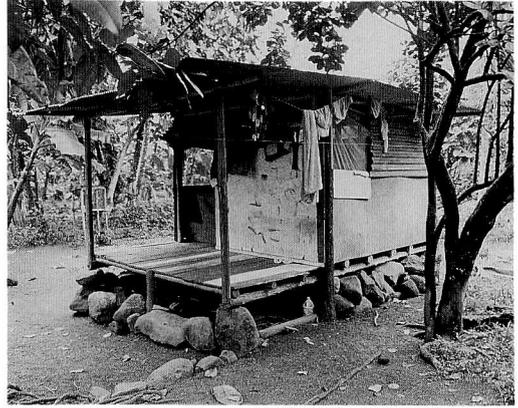


図15 ポンペイ島の民家



図16 ポンペイ島の集会所三方が板敷，中央が土間になっている。

は開放的な部分と閉鎖的な部分から成っている（図15）。共に板敷であり，開放的な部分は容易に腰かけることができる。また腰かける意図で高さを決めていたともいえる程丁度よい。外から帰って来てまずその板敷に腰かける。主屋とは別に集会所では多くの人々が腰かけられるために左右に板敷を出し，丁度コ字型に板を敷いて中央を土間にする（図16・17）。つまり板敷に腰をおろし，土間に足を出す。裸足に土が付いていても土間に出したままにするので別にかまわない。この板敷の使い方は土間に並べた椅子と類似する。日本の板敷とは異なり，土間と板敷とがポンペイ島ではうまく融合している。この使い方は日本では見られない。この使い方を学ぶ必要があるし，それによって失われつつある土間に再び光をあてうるかもしれない。

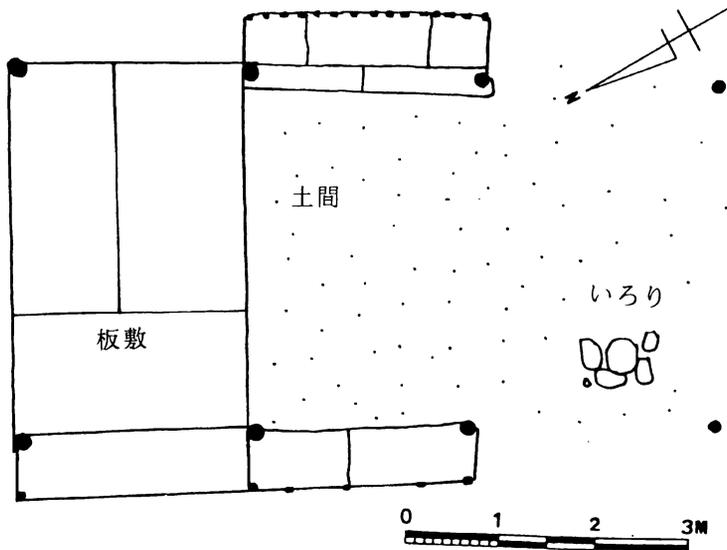


図17 ポンペイ島の集会所平面図

6. 土間と板敷の融合

中国漢民族の住居は土間の生活であり（図11）、韓国の住居は日本と同じく土間と板敷の生活である（図10）。中国少数民族土家族の住居は土間と板敷の生活であるが（図12・13）、ヨーロッパの住居と同様に土間の生活というのだろうか。韓国の住居も日本の住居も土間と板敷を区別している。それは履物を脱ぐということに関係することも述べた。ポンペイ島では現在多くの人々が靴を履いているが、以前は裸足であった。この裸足が土間と板敷を融合させるにいたったと考えてみたしだいである。土間から板敷に腰をおろして、話し合い、疲れれば身体を横にして、足だけを土間に出して休む。更に板敷に上がるとしたら、手で足のゴミを落とす。この腰をおろす板敷が大切な役割を果たしていることに気づく。それでは日本の板敷に腰をおろす仕掛けを配置すれば土間との融合をはかることができるし、土間の意味を再認識することができる。韓国の住居においても日本の住居においても土間から板敷に上がる場合、踏段石があって容易に履物を脱いで上がることができる。しかし腰かけるには不向きである。それは当然であろう。履物を脱がないで腰かけるために土間と板敷の境があるわけではなく、履物を脱ぎやすくするために踏脱石があったりするからである。そこで土間の重要性を考慮して、二つの方法を試みてみたい。

その一つは玄関から裏口まで通路としての土間を設けることができないかということである。玄関は玄関としての目的があり、使い方がある。裏口もまた同様である。それにもかかわらず玄関と裏口を土間でつなぐ理由はどこにあるのか、それは目的の部屋の近くまで行って履物を脱げばよい。これは土間を廊下と同様な使い方を試みることである。

もう一つは次の方法との組み合わせで意味をなすということである。二つ目の方法としては土間に接して腰かける板敷を設けて、そこを客人などと話し合う場に使うということである。その土間は通路にもなり裏口へと繋がる。

これは土間を住居に積極的に使うことへの試みである。

7. おわりに

土間と板敷の生活に分けて考えてみた。しかし、土間と板敷の生活だけでなく、その中間的存在もある。インドネシアでは土間に板を直接敷いてそこを寝台にしていた。それは土間の生活というべきであろうか。また日本の東北では土間の一部にもみがらを厚さ5センチ程敷いて、その上にむしろを敷く。それを土座という。それは、板敷の生活とはいえないだろう。しかし、履物を脱いで上がるので、ここでは板敷の生活に含めたい。したがって、直接身体が触れる床材をすべて板敷と考えている。板が敷いているとか敷いていないとかを尺度とせずに履物を脱いで上がる場を板敷の生活の場としてとりあつかった。

現在この板敷きの生活を中国でもとり入れており、世界的に注目されている。このことを最後に加えておきたい。

注1：野村孝文「南西諸島の民家」相模書房 昭和36年

参考文献

浅野 清『奈良時代建築の研究』中央公論美術出版社、1969

『住まいの科学』（九州大学公開講座4）九州大学出版会、1981

『宝台遺跡』日本住宅公団、1970

富永茂人（編）『南太平洋海域調査研究報告No.26』鹿児島大学南太平洋海域研究センター、1995

『文化財紀要第3集』北郷町教育委員会、1995